

高等学校教材(日语专业用)



日本文化史

孙宗明 编著

上海外语教育出版社

高等学校教材(日语专业用)



# 日本文化史

孙宗明 编著

上海外语教育出版社

(沪)新登字203号

高等学校教材  
**日本文化史**  
(日语专业用)  
孙宗明 编著

---

上海外语教育出版社出版发行

(上海外国语学院内)

上海市印刷三厂印刷

新华书店上海发行所经销

---

开本 850×1168 1/32 8:125 印张 8 插页 180 千字

1993年3月第1版

1993年3月第1次印刷

印数: 1—5,000册

ISBN 7-81009-809-8/H·386

定价: 5.80元



縄文式土器  
〔長岡市馬高出土〕  
（長岡市立科学博物館）



埴輪  
〔群馬県前橋市出土〕



积迦三尊像(法隆寺·金堂)





不空羂索觀音像(東大寺・三月堂)



阿弥陀如来像(平等院・鳳凰堂)

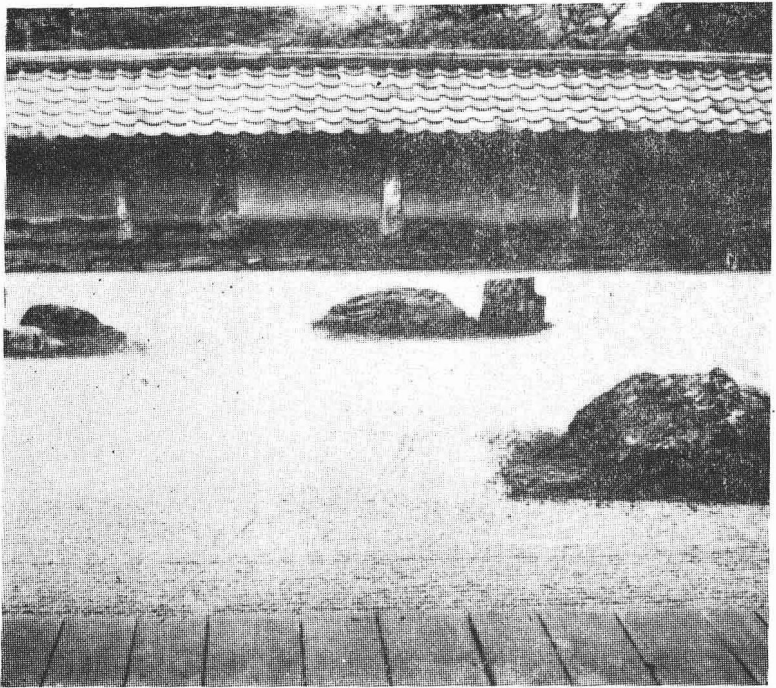


源氏物語・宿木巻部分(徳川美術館)





不動明王像(願成就院)



龍安寺 石庭



姬路城

## 前 文

石田一良博士の日本小学館百科全書所載の「日本の思想」「日本文化——日本の心と形」(日本語版東海大学出版会、中国語版上海外語教育出版社)を台本とし、「形と心——日本美術史入門」(日本語版芸艸堂、中国語版浙江省美術学院出版社)「文化史学・理論と方法」(日本語版ぺりかん社、中国語版浙江人民出版社)その他「カミと日本文化」(ぺりかん社)等の博士の日本語の諸著書論文を参考文献とし、兼ねて従来日本の学界で定説とされてきた諸説を批判的に併載し、編者本人の所見を加えてこの編著を作った。これによって一応日本における日本文化史の最高水準を紹介し得たと考えているが、今後一層の補修を加えるつもりである。この著を濫觴として今後中国でよりよい日本文化史教科書の出版されることを期待する。

本書の刊行に当って、「国際交流基金日本語国際センター日本語教材作成助成」を受けた。ここに深甚の謝意を表明する。

孫 宗 明

一九九二年十月

# 目 次

<b>第一講 始原時代の文化</b> .....	1
一、上代日本人の空間観念.....	4
二、上代日本人の時間観念.....	11
三、時・空間観念の展開と氏制国家の成立.....	15
四、神道の成立——呪術から宗教へ.....	22
五、共同体の生活と神道.....	28
<b>第二講 奈良時代の文化</b> .....	33
一、大陸文化の伝来と古代統一国家の形成.....	34
二、氏制律令国家の成立とその理念.....	42
三、国民国家の思想と古典美の成立.....	51
<b>第三講 平安時代の文化</b> .....	63
一、格式政治の論理.....	65
二、平安時代初期における仏教の展開.....	70
三、摂関政治の構造と理念.....	75
四、宮廷貴族の信仰とその美術.....	81
五、王朝文化の残照.....	88
<b>第四講 鎌倉時代の文化</b> .....	97
一、後白河＝源頼朝体制.....	99
二、貴族と新古典主義.....	104
三、宗教的個人主義・自然主義の思想と芸術.....	111



四、鎌倉武士の政治と宗教・美術……………	117
<b>第五講 室町時代の文化……………</b>	<b>126</b>
一、足利幕府政治の理念……………	128
二、関数主義の思想と芸術……………	135
三、人間と自然の復権……………	144
<b>第六講 戦国——江戸時代の文化……………</b>	<b>155</b>
一、徳川封建体制の政治・経済……………	157
二、近世封建体制支持のイデオロギー……………	168
三、封建大都市生活の思想と芸術……………	178
<b>第七講 明治時代以後の文化……………</b>	<b>194</b>
一、文明開化運動の形成とその精神構造……………	195
二、家制立憲国家の理念と近代日本人の成立……………	208
三、大正の思想と昭和の精神……………	220
<b>付録……………</b>	<b>235</b>
<b>跋……………</b>	<b>254</b>

## 第一講 始原時代の文化

始原時代というのは、従来は、新石器時代と呼ばれる縄文文化の時代(数千年前から紀元前三——二世紀ごろまで)、金石併用時代といわれる弥生文化の時代(紀元前三——二世紀ごろから紀元後二——三世紀ごろまで)を経て、古墳時代の中期、六世紀ごろまでの時期を指していた。しかし、最近では、日本にも縄文文化に先行する無土器文化の存在することが旧石器の発見によって確認せられている。これは日本列島における人類文化の起源が古く、いまから数万年前にまでさかのぼることを物語っているが、この時代についてのくわしいことは、まだじゅうぶんには明らかにされていない。

縄文文化は狩猟・漁撈の原始生活の文化であったが、人間が集団的な生活を営むようになり、集落が構成されたことが認められる。

この時代では人間が集団で狩猟・漁撈・採集を主とする非生産生活を営んでいたと考えられる。

紀元前三——二世紀のころ。縄文文化の時代は弥生文化の時代に代った。弥生時代になって、人間は石器の使用から金属の使用へ、狩猟・漁撈の採集経済から水稻農耕の生産経済へと生活が移行していった。中国大陸から水稻農耕技術を導入して開始された水稻農耕生活は、日本社会の構造を一変させた。オ

稲農耕という生産方法で日本の風土に働きかけて、社会の生産力を生み出すようになった生産方法の変革は大きな産業革命であった。ここから今日に至る二千年にわたる水稻農耕時代の文化史が展開されるのである。(この水稻農耕時代は今まで続いている。第二回目の産業革命の時代である明治時代以後、現在のような道具的な機械を使って生産を営んでいる時代は、道具を使用するという点で前の時代の連続であり、今後訪れる本当の意味での機械工業の時代に移行する過渡期である)。

採集経済から農耕生産経済への移行につれて、生産力の発達にともなって貧富・権力の差が生じ、原始共同社会から階級社会への道が開かれ、政治的統一の機運が急速に成熟していった。かくて弥生時代の半ばをすぎた紀元一世紀前後には日本の各地に小さくくぐにが形成され、それが次第に統一されて、三世紀には邪馬台国等を中心とするいくつもの大きな地域的・政治的統合体が成立するようになった。

やがて、大和地方の一豪族が急速に台頭してその地方を統一するだけでなく、さらに周囲のくぐににその勢力を拡げていった。「大王」(すなわち、後に天皇と称するようになった)による大和国家が成立したのである。三——四世紀以後における多くの労働力と巨大な資材を投入してつくられた古墳、特に前方後円墳の発達は、このような統一的な政治的權威の形成過程を物語っている。

さて、大和朝廷の勢力は四世紀の中ごろまでには九州南部や東北地方を除いて広く日本の全域におよび、四世紀末から五世紀初めには、朝鮮・中国との間にも外交関係を持つようになって

た。

この大和国家の政治体制は氏族制度（原始封建制度）であった。中央大和地方の部族集団（氏族）は各族長（氏上）に統率されて世襲の大王に仕えて大和朝廷を構成し、各豪族が国家の事務をそれぞれ分担するようになり、各種の職業・労働の集団（部）がそのもとに組織された。地方では国造・県主らが同様の組織をもってそれぞれの地域を治め、大和朝廷に帰一していた。大和の「大王」は各地に分立している諸小国の「王」の支配的地位をそのまま容認し、その上に間接に支配し君臨するという、いわば諸小国連合の形で日本の君主となったというのである。それは諸小国（氏族）の絶対的独立は否定するが、相対的独立は許すという、原始的な封建制度であったのである。この氏制（原始封建制）国家の形成は始原時代における最大の歴史事件であったといえよう。

前に述べたように、始原時代においては、狩猟採集時代から水稻農耕時代に代る「近代化」とも言うべき大きな変化があった。日本に南中国から水稻農耕技術が伝来して展開された水稻農耕時代の文化と、それ以前の狩猟採集時代の文化とは全く異質なものと見える。それは同じ日本の風土、すなわち同じ地理的環境と気候条件によって生れたものであっても、人間が自分の労働力を自然に働きかけ、それを通じて社会的生産力をつくり出す生産社会を形成していた水稻農耕時代の文化と、自然の資料の獲得だけに頼る採集社会を形成していた狩猟漁撈時代の文化とは性質が全く異っているからである。現在我々が「日本文化」と考え、或いは研究の対象としているのは、実はこの水